

ヒーリングタウン おへんろ道編 ささぐり

④

「正一！もう一杯。カウナーに座る常連客から注文の声が飛ぶ。呼ばれた長正一さん(44)は威勢よく「生一杯」と応え、冷えたグラスにビールを注いだ。

24時間営業のスーパードが並び、近年は新興住宅地としてマンションなどの開発が進んだ篠栗町尾仲長さんの店「れあるた」は、同町の繁華街の一角に焼き鳥屋などとともに軒を連ねる。

「ふわとろオムレツ」「レノンコンまんじゅう」など、さまざまの創作料理約130点がメニューに並ぶ。オープンのは昨年6月。それ以前、長さんは標高約360分の荒田高原で「遠海屋旅館」を父母や妻と営ん



「おこげと白身魚の中華あんかけ」を出し、上からあんをかける長正一さん(左端)

もてなしの心で展開

でいた。「俺、山を下りて商売始めるわ」。跡取りの長さんの決断は周りの旅館関係者に波紋を広げたという。

おへんろの里・篠栗町。



宿の拝巡

「篠栗町誌」によると1955年、町内に67軒の「へんろ宿」があった。毎年3〜5月には各軒、1000人を超す団体客でにぎわったという。

長さんも少年のころ、近所のへんろ宿の友人たちとキャッチボールしながら、「うちほききょう70人みたいよ」と宿泊客数を教え合った。89年に大学を卒業し、旅館を手伝ったが、半年ほ

篠栗の宿事情

篠栗町内にある宿は現在、おへんろさんを受け入れるために設けられた「へんろ宿」がほとんど。全長約50キロのへんろ道を歩いて巡るおへんろさんが、1日の行程を終える所になりやすい山手地区、荒田高原、JR篠栗駅前などに集まる。寺院が敷地内で営む宿坊もある。1960〜70年代、大広間に布団を並べ、複数の団体が寝ることもあったという。

どて家を出た。当時、長さんの目には、宿泊客の高齢化と減少に歯止めがかけられないように見えた。おへんろさんの世代交代は進むのか。心配になった長さんは「料理で人を呼べる旅館」を志した。

福岡市・天神のホテル、大分県別府市の旅館、そして福岡市・博多のホテル。約8年間の修業をへて実家に戻り、料理人として働き始めた。

しかし、へんろ宿を取り巻く環境の厳しさは変わらな

長さんは経営の多角化に旅館の将来をかけた。新たな収入口を見いだせなければ、学資不足で2人の息子の進路も狭めかねない。

「れあるた」は順調に船出した。旅館で出していた料理を手軽に食べられると喜んでくれる客。家族連れも多い。高校3年になった長男は「後を継ぐよ」と、調理専門学校への入学を決めた。「挑戦してよかった」。

長さんはしじみ思っ。店を軌道に乗せ息子に譲れるようになったら、旅館に戻ることも考えている。

「おへんろさんも大事にしながら、新たなお客さんを掘り起こすため、各旅館とも特色づくりを迫られてる」。篠栗町旅館組合の